

「自分らしさを発揮する」校内別室の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、明朗な性格で友人も多く活動的だが、学校生活には漠然とした不安がある。自分にはこれではできないと思うと行動がストップしてしまう。入学当初は運動部に入るなど意欲を見せたものの、数週間で不登校になった。別室登校に切り替えたことが効果的で、通学のリズムが整いつつある。

具体的な取組

○より「快適な」居場所づくり

教室レイアウトは、利用生徒の理想をホワイトボードに描いて、実際に机を動かし試行錯誤しながら、決定した。また、不要となった段ボール箱を使い、教室の備品を自作した。ボール紙製のパーティションや展示物コーナーができあがり、教室を自分たちで整備している。

○校内・専門機関との連携づくり

学級担任と教育相談部、SC、別室支援員間で情報を共有し、多角的な視点で対応する。不登校対応巡回指導教員の来校日（週1日）には小集団でのレクリエーション時間を設けた。興味ある分野を自由に調べてプレゼンする試みが好評で、知的好奇心の育成に役立っている。

○個別学習の設定および対応

学習への取組は当該生徒の自主性に任せている。自身で適切な教材を考え、用意する。やる気が起きない時には「TODO リスト」を使い、当該生徒にできる範囲で計画を立てられるようにしている。



○部分的な教室復帰のサポート

どの授業・活動であれば教室参加の抵抗感が少ないかを当該生徒に相談し、一日の時間割を作成する。「最後方の席で」、「1時間だけ」、「午後から」など、スモールステップで進める。儀式行事は、例えば「始業式ツアー」などのように独自のイベントに置き換えて参加できるようにし、対応している。

成果

進級を機に在籍学級に2か月間の短期復帰を果たし、5月の運動会にも参加した。6月以降は別室登校に戻ったが、欠席日数は大幅に減少した。毎日（週5日）午前中を校内別室で過ごせるようになり、チャレンジスクールの受検に意欲を見せている。

課題

支援員1人が教室を運営している。支援員が休んだ場合の体制、生徒と2人きりの場合の対応などが課題である。

居心地のよい居場所の設定支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の 1 学期は通常どおりに登校していたが、2 学期に新型コロナウイルスに感染し、1 週間ほど欠席したことがきっかけとなり、不登校になった。保護者は協力的で、学校に行かせたい気持ちがある。

具体的な取組

○個別学習の時間・内容設定

一日の中で 15 分は学習時間とし、個人で取り組む時間を設けている。持ち込んだ教材や、美術の作品作りなどを自分で選択して個別学習を行っている。学習指導については、別室利用の生徒からの質問を基に指導を行ったり、オンラインで動画を見ながら進めていく学習カードなどを活用したりした。

○ＳＣとの連携

カウンセリングを受けたことがない生徒については、ＳＣの空き時間に別室に来てもらい、関係を作ってからＳＣにつないだ。別室で生じた人間関係の課題について、ＳＣのカウンセリングを通して自分の課題や人との関わり方に向き合った生徒もいた。

○教員と支援員の連携

別室に電話を置き、職員室に連絡をしやすい環境にした。また、職員室内にあるホワイトボードに別室教室利用生徒の登下校の時間を記入し、職員室内の教員と連携を取る機会を設けた。生徒の一日の様子や活動内容を書くシートを作成し、コーディネータと管理職が毎日確認し、連携を図った。

○コミュニケーション活動

不登校対応巡回教員の出勤日に英会話やパズル、卓球、進路のための作文指導などを行った。他者と関わるのが苦手な生徒が多いため、不登校対応巡回教員や学年の教員が指導をすることを校内委員会で話し合い、活動を始めた。



成果

個別学習指導では自分で目標を決めて、自分のペースで学習を進めることができた。コミュニケーションの活動では、パズルの作成を通して、生徒同士の連帯感を強め、関係づくりを進めることができた。

課題

別室利用のルールが確立していない点があったことで、秩序が守られない場面が何回かあった。ルール作りを丁寧に行い、生徒、保護者、教員間で共通理解を図ることを徹底していく。

不登校対応巡回教員を中心にした不登校生徒支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の 11 月頃から人間関係で悩み始めた。インターネット等で事例や自分のことについて検索する中で不安が募っていき、遅刻・早退が増加し、欠席が目立つようになった。保護者は当該生徒の様子を心配して、病院で認知行動療法を受けるようになった。

具体的な取組

○アセスメント

不登校対応巡回教員を中心に、アセスメントに重点を置き、ケース会議を実施した。学級担任、保護者、SC による生徒観察の様子等の情報を校内不登校対策委員会にて収集・分析・共有し、方向性を確認した。

○校内委員会

不登校対応巡回教員が不登校担当教員と随時連絡・調整を行っている。

週 1 回の校内委員会では、生徒の状況や変化を共有し、生徒との関わり方において、不登校担当教員、不登校対応巡回教員、学年担当教員、養護教諭等が共通した対応ができるよう調整している。

○校外学習

当該生徒の気持ちに寄り添いながら、不登校対応巡回教員が「自己肯定感を高めさせること」、「対人関係を学ぶこと」を目的として校外学習を 2 度企画し、実施した。



○別室指導

別室指導では、多くの生徒が 9 時頃に登校して学習したり、別室の仲間とコミュニケーションを図ったりしている。別室で昼食を共にとった後、16 時頃に下校する習慣が定着してきた。不登校対応巡回教員も週 1 日、支援に当たっている。

成果

当該生徒は、集団内でコミュニケーションが図れるようになり、自己肯定感が高まりつつある。

校外学習を実施した際は、不登校生徒の一人がまとめ役となって企画を進行することができた。

課題

校内別室が「安心できる居場所」から「居心地よすぎる居場所」となりつつあるため、教室復帰につなげていく。

不登校対応巡回教員の配置に伴う支援体制について

不登校生徒の状況

昨年度から校内別室を設置し、今年度からは不登校対応巡回教員が配置された。対象生徒は、不登校対応巡回教員の支援を継続して受け、登校できるようになった。校内別室は、学校生活で不安を感じる場面などの一時的に気持ちを落ち着かせるために使用するなど、不登校の未然防止にも役立っている。

具体的な取組

○別室対応による不登校生徒の支援

教室以外での場所で心の安定や家族以外の人と関わり、社会とのつながりを維持できる「居場所」を目的として校内別室を開設した。当該生徒は不登校対応巡回教員の勤務日には、校内別室でソーシャルスキルトレーニングなどの小集団での学習活動を行ったことにより、生徒同士のつながりが構築できた。

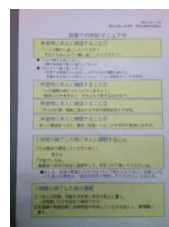
○校内体制の強化

校内委員会の中で当該生徒に毎週の出席状況を報告し、現状分析を行う。当該生徒の欠席が続いた場合は、保護者へ電話連絡をして近況報告や家庭訪問、校内別室登校を促す。必要に応じて、ＳＣなど専門家チームとの連携を図っている。

○校内別室支援の構造化

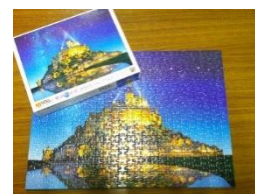
当該生徒をはじめ、全ての生徒が安心して過ごせるような校内別室の環境整備を行うとともに、学習の仕方、別室での利用マニュアルを作成した。

また、生徒の実態や学校の体制に応じて校内委員会で校内別室の利用のマニュアルの修正を行っている。



○校内別室での活動内容

校内別室では、学習だけでなく、小集団でパズルの制作活動も行っている。



成果

不登校対応巡回教員の配置により、他校の取組状況を踏まえた校内別室支援を整えることができた。また、不登校生徒の家庭への電話連絡や小集団での学習活動など、支援の選択肢が増えた。

課題

学級や校内別室、フリースクール等につながっていない生徒への支援をより強化する。